

ジビエ：鳥獣被害から地域資源の活用へ

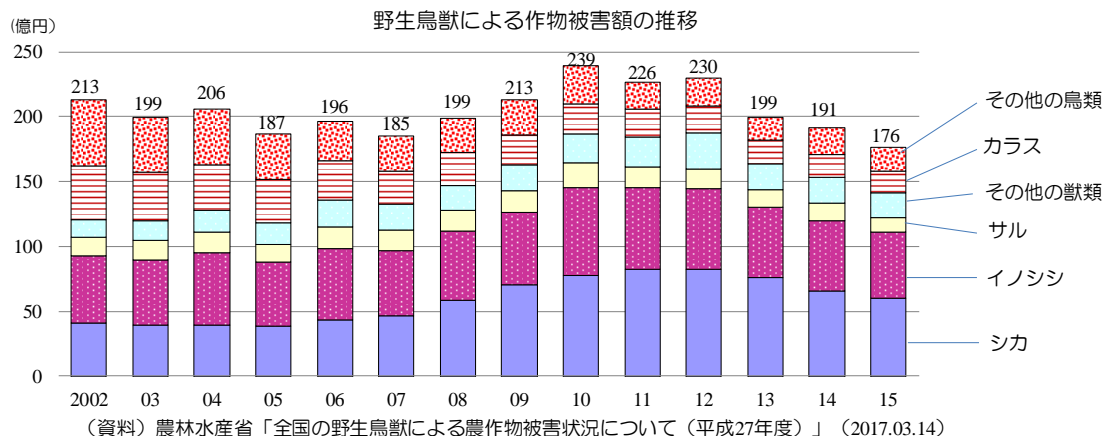
◆和歌山県古座川町のシカ肉料理がジビエグルメ賞を受賞

2017年11月、「ディスカバー農山漁村の宝」の特別賞、ジビエグルメ賞として和歌山県古座川町の古座川ジビエ振興協議会が選ばれた。「ディスカバー農山漁村の宝」は農山漁村活性化の優良事例を選定し、全国に発信するもので、今回選定された優良事例31件中、ジビエ関連は古座川のほか長野市・信州ジビエ研究会、鳥取県若桜町・わかさ29工房の3件が選定されている。

ジビエとは、狩猟で得た天然の野生鳥獣の食肉を意味するフランス語で、牛や豚、鳥などに続く食肉としてシカやイノシシが注目されている。古座川町ではシカ肉を「古座川清流鹿金もみじ」と銘打ち、首都圏飲食店のメニューにも入っている。「里山のジビエバーガー」は16年の全国ご当地バーガーグランプリで優勝し、バーガー購入者を抽選で招待しジビエ体験ツアーを催したり、町内の小中学校の給食にジビエ料理を出すなど、地域活性化の好事例として評価された。

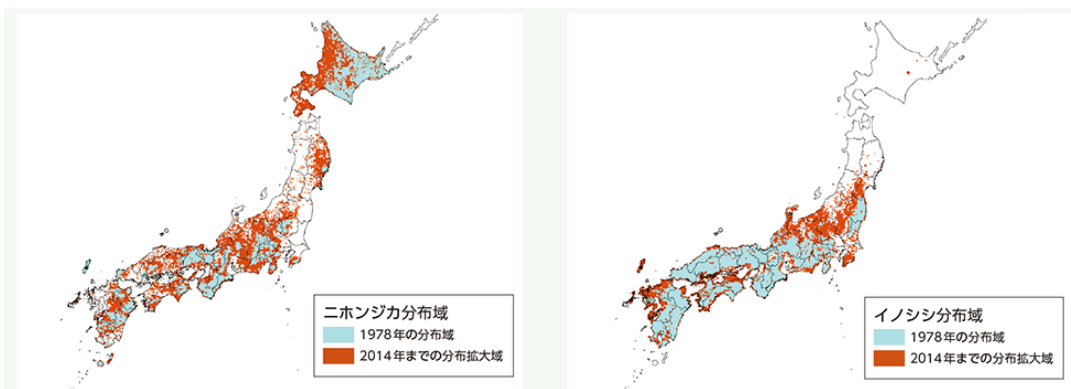
◆農産物の鳥獣被害は約200億円、シカやイノシシの生息域が拡大

ジビエとして注目されるシカやイノシシは、農山村にとっては害獣でもある。収穫前の農作物を食い荒らす、田んぼの稲を踏み潰すなど、野生鳥獣による農作物被害は200億円前後にのぼり、全体の7割をシカ、イノシシ、サルが占めている。地表の植物を食い尽くし、樹皮を食べて樹木が枯死するなど、森林の被害は年間8千haで、シカによる被害が8割を占めている。



鳥獣被害の背景には、農山村で農林業従事者が高齢化、減少していくなかで、農地や林地の手入れが行き届かなくなり、鳥獣の生息域との境界が曖昧になってきたことがある。ここ数年、被害額は減少傾向を示しているが、農業自体をやめたので金額が算定されないという面も大きい。対策としては、人間と鳥獣の境界を明確にするため電気柵などの防護柵を設置する、緩衝帯を設置する、わなで捕獲する、追い払うなど、粘り強く対策を講じていくほかないようだ。

また、シカやイノシシの生息数も増加している。シカ（ニホンジカ）は終戦当時は絶滅が危惧され、メスジカが狩猟対象から外された経緯がある。しかし、1945年に国土の10%に過ぎなかったシカの生息域は78年に20%を超え、14年には国土の過半を占めている。イノシシも78年から14年で生息域は1.7倍に拡大している。狩猟免許所持者の高齢化、減少も野生鳥獣増加に拍車をかけている。



(資料) 環境省「平成28年版 環境・循環型社会・生物多様性白書」
<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h28/html/hj16020201.html>

◆シカやイノシシを半減が目標、捕獲した鳥獣はジビエ活用へ

環境省や農水省では、生態系や農林水産業に深刻な影響があるとして、シカやイノシシの生息数を23年度までに半減を目標としている（シカ：316万頭→155万頭、イノシシ：96万頭→50万頭）。捕獲強化に向け、狩猟免許取得年齢の引き下げや講習会等の充実などの対策が講じられており、ここ数年、狩猟免許取得者数は増加傾向を示している（89年：5,431人→13年：12,434人）。

また、捕獲した鳥獣のジビエ等への活用も促進されている。現在、捕獲鳥獣は廃棄処理が多く、食肉利用は1割程度とされる。ジビエの利用拡大に向け、18年度は、捕獲から搬送・処理加工をつなぐモデル地区が12地区ほど整備される。野生鳥獣が害獣から有益な地域資源に変わるか、注目される。 【長谷川雅史】